

# 夏期日本語教育報告

## 総 括

夏期日本語教育主任  
桜木 ともみ

### 1. はじめに

本学における夏期日本語教育（Summer Courses in Japanese、以下 SCJ）は、開学以降約 70 年にわたり本学の日本語教育を担ってきた日本語教育課程（以下、JLP）が中心となり、通常学期と連携しながら運営されてきた。参加者は、学外からの一般参加希望者をはじめ、ICU 本科生として JLP を履修中の学生、交換留学枠や協定校からの受入学生等、様々な国から多くの受講生を受け入れてきた。しかし、2020 年に広がった新型コロナウイルス感染症による影響は大きく、2022 年度も昨年度に続きオンライン開催とすることが決定された。感染者の拡大や世界情勢の悪化等、先行きの見えない状況の中、大学全体で開催形式やキャンセルの可能性を慎重に検討しつつ準備を進める必要があった。

こうした状況でも最後まで無事に開催できたのは多くの関係者のご理解とご協力の賜物である。また、困難な状況にあっても自身の学びに前向きに取り組んだ受講生と、その一人ひとりを最後まで親身に支えた先生方に、改めて心からの敬意と感謝の意を表す。

以下では、2022 年度 SCJ の概要を報告し、今後に向けての課題を述べる。

### 2. 準備期間

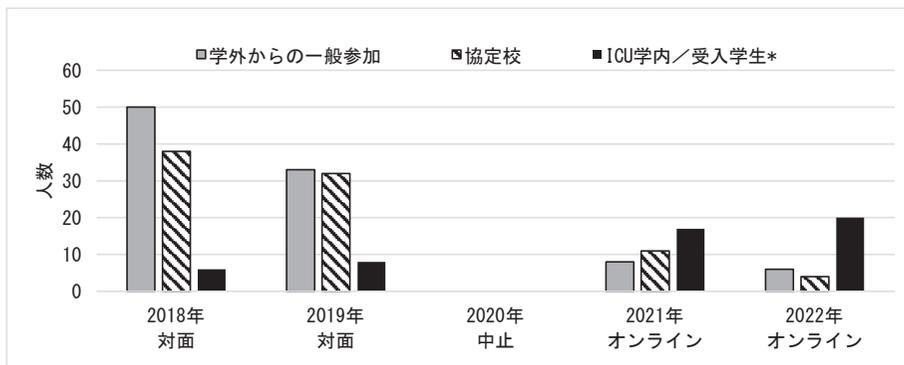
2021 年度 SCJ 修了後の 9 月に前任者より引継ぎがあり、10 月から 2022 年度運営メンバー<sup>(1)</sup>による SCJ 定例会が開始された。SCJ 定例会は事務方と教員が話し合うための重要な場であり、準備から開講期間まで一年を通して計 25 回開催された。10 月中には学内の幹部会等で開催形式を決定する必要があるため、SCJ 定例会で対面開催とオンライン開催のそれぞれについて、これまでのデータ、想定される予算、懸念事項等をまとめ、提案を行った。その後、学内で正式にオンラインによる開催が決定され、12 月には講師募集・学生募集をそれぞれ開始した。しかし国内での感染者数の広がりから学生応募数が伸びず、3 月にはコースの一部キャンセルや講師の雇用条件（キャンセルポリシー）を検討する必要が生じた。日本語コースの準備が本格的に始まる 6 月までの過程に、これまでのサマーコースの経験では対応できない未知のケースがいくつもあったが、運営メンバーと学内外との連携のおかげでよりよい対応策を検討し、無事に SCJ を開講することができた。

### 3. 募集と参加者

学外募集は 2021 年 12 月末から開始し、学内募集は 2022 年 2 月と 4 月に行った。計 40 名の応募があったものの、合否発表の前後に 10 名辞退があり、2022 年度の参加者

数は30名となった（事務報告4参照）。

図1は、過去5年間の参加者数の推移である。対面開催であった2019年までとオンライン開催をした2021年・2022年を比べると、オンライン開催では協定校・学外からの一般参加者が特に少なかったことが分かる。協定校や一般応募の学生は、オンライン開催ではビザを取得できず来日が許可されないため参加を見送ったケースも多かったと考えられる。2022年度SCJの応募を開始した時期は日本の新型コロナウイルス感染症は「第6波」と言われる急激な拡大の最中にあり、3月に外国人入国停止措置がようやく緩和された後も多くの留学生が入国できずにいた。不安定な状況に加え、世界的に学生の「オンライン疲れ」があったことも参加者数が伸びなかった要因の一つだと考えられる。



注 「ICU 学内／受入学生」とは、在學生、入学予定者、外国籍の教員、シリア人学生、ウクライナ人学生、J Live Talk（George Washington University 主催の日本語プレゼンコンテスト）の受賞者を指す。

図1 過去6年間の参加者数推移

一方で、学内からの参加者と、ICUが受け入れている学生の参加者数は20名と、対面開催の2019年の倍以上に増えている。その内訳は事務報告でも示すとおり、在校生11名、ICU入学予定者1名、教員1名、そして日本国際基督教大学財団（JICUF）を通じてICUが受け入れているシリア人学生2名、ウクライナ人学生5名であった。在校生11名のうち、3名がJLPを履修中のICU本科生、8名が大学院生であった。昨年度に続き外国籍の教員（1名）の参加もあり、通常学期中は日本語の授業を取りにくい院生や教員にとって貴重な日本語学習の機会となったようだ。

また、母国での学習が困難となって来日したシリア人学生やウクライナ人学生、計7名にとって、日本での生活や大学に慣れるためにも日本語をできるだけ早く学ぶ必要がある。今回参加した7名は全員日本語学習への意欲が高く、6週間を通じて確実に日本語力を向上させていた。クラスでの活動や交流プログラムなどにも積極的に参加し、自国の文化等について紹介したり発表したりすることも多く、クラスメートの学生やビジ

ターとして参加した ICU 生にとっても非常に良い学びの機会となっていた。この 7 名が落ち着いた状況で日本語学習に取り組むことができた理由として、大学のサポートによりキャンパス内の寮に滞在でき、安定した環境で日本語学習に取り組むことができたことが大きいだろう。加えて、全員来日前に日本語学習経験があり、日本語がゼロで来日した場合に比べて日本語の授業や生活上のストレスが少なかったと推察する。更に、7 名のうち 6 名は春学期から JLP の授業に参加して慣れており、新しく来日した 1 名がそこに参加できたことも夏の集中コースに順応できた理由の一つだろう。

オンライン開催となったことで応募者数は想定より少なかったものの、今年度は学習意欲の高い受講生が多かった。ほとんどが 6 週間を通じて欠席することなく授業に参加し、特別な事情による 1 名を除き全員がリタイアすることなくコースを終えることができた。日本語学習機会を「今」必要としていた人々のために、サマーコースをキャンセルせずに提供できたことは幸いであった。SCJ の期間中も日本国内では「第 7 波」による爆発的な新型コロナウイルス感染拡大が起こったが、状況に左右されることなくサマーコースを開催・継続できたことから、今年度の開催形式をオンラインに限定した意義は大きかったと言える。

#### 4. オンラインによる SCJ 運営の概要

2022 年度 SCJ は開催形式だけでなく運営もほぼオンラインで進められた。準備から開催まで、オンラインでの運営がスムーズに進み、大きな問題やトラブルもほとんど生じなかったのは、昨年度の経験と蓄積があったからにほかならない。SCJ 運営メンバーのうち、センター長、交流プログラム担当、事務スタッフは昨年度のオンライン開催を支えてきた教職員が継続した。主任と教務主任は交代したが、昨年度の学習管理システム (LMS) や資料等が全て引き継がれ、また昨年度担当者とも適宜相談できる体制があり、大変心強かった。クラスキャンセルや採用講師数の調整、プレースメントテストの改善など、今年度新たに対応が必要だった課題も多々あったが、Zoom や Slack などを利用し、メンバーや該当部署と検討し、対応した。

また、オリエンテーションと修了式も Zoom で開催した。オンラインであったが、学長をはじめ関連部署の多くの教職員も参加したにぎやかな会となった。オリエンテーションでは、通常の説明に加えオンラインコースの受講規則や教材の扱い等の確認も行った。修了式では各クラスの出し物 (スピーチ、歌、ミニ発表など) が披露された。学長からのコメント、SCJ 助手とボランティアによるスピーチ、教職員の参加等のおかげで、非常に良い雰囲気での修了式となった。修了式が祝日の開催となってしまったが、多くの教職員の方に参加していただけたのは有難かった。SCJ の参加者 (本科生、院生、交換留学生、提携校からの学生等) に関連する部署は複数あるが受講生と直接顔を合わせることは殆どない。そのため、実際の受講生の様子や成果を確認できる場として、SCJ のオリエンテーションや修了式は良い機会になったのではないだろうか。SCJ の後も継続して ICU で学ぶ学生のサポートや、今後の開催準備の検討のためにも、こうした場を共有することは有効であると考えられる。

SCJ 運営の詳細については「教務報告」、「交流プログラム報告」を参照されたいが、

ここでは SCJ を支えた貢献者である学内の学生について述べておきたい。日本語コースと交流プログラムの運営はそれぞれ教務主任と交流プログラム担当がとりまとめた。その指示のもと、学内募集して決定した「SCJ 助手」が日本語の授業ビジターや交流プログラムを始め、オリエンテーションや修了式でも活躍した。また、今年度も多くの ICU 生が「SCJ ボランティア」として登録し、日本語の授業や交流プログラムに参加してくれた。サマーコースへの理解と協力のおかげで、SCJ 参加者と ICU 生の交流の場を設けることができたことに改めて感謝したい。

## 5. 終了時のアンケート結果

### 5-1 受講生へのアンケート結果

コース終了時に受講生にアンケートを実施し、30 名中 22 名から回答を得た。その結果によると、コース全体に対する満足度は高かった（Very dissatisfied から Very satisfied までの 4 段階で平均 3.77）。また、Zoom、Google Classroom 等のオンライン学習環境に対する満足度も高い結果を示し（Very dissatisfied から Very satisfied までの 4 段階で平均 3.55）、オンライン授業にうまく対応して参加できていたことが伺える。

学生からの評価が特に高かったのはコースの担当講師の丁寧で熱心なクラス運営についてであり、受講生全員から肯定的な評価を得た。具体的には、毎週の Tutorial session や課題へのフィードバック等で細やかなサポートを得られたことを評価する回答が見られた。

改善を希望する点としては、短い時間に集中的に学ぶコースであるために課題や学習管理が負担になる点や、対面で会えなかったことへの不満があった。時差のある中で受講していた学生にとっては、集中コースであったことが特に負担だったようだ。これは交流プログラムへの参加度とも関連していたようで、「参加しなかったが課題が忙しくて参加できなくなった」「時差があり参加できなかった」等の声があった。

### 5-2 講師へのアンケート結果

雇用手続きや準備期間を含む運営全体のサポートや内容について、講師にアンケートを実施し、11 名全員から回答を得た。その結果、全体的に評価が高く、5 段階評価の平均点はいずれも 4.2 以上であった。特に高評価（平均 4.7 以上）だった設問は、「SCJ に講師として参加した満足度」「主任・教務主任のサポート」「IT サポート」「授業ビジターの手配」「事前共有した資料・情報」「日本語教育情報シェア会」であった。また、今年度改良を加えたプレースメントテストについても肯定的な評価（平均 4.6）をいただいた。今年度から加えたスピーチ動画はレベル判定のために効果的だという声が多かった。詳細は「教務報告」を参照されたい。

改善を求める声としては、集中コースであるために教材の調整や学生へのサポートが必要だという指摘もあった。重要な指摘であり、今後の運営に役立てていきたい。

## 6. おわりに

以上、概観ではあるが 2022 年度 SCJ の総括を述べた。サマーコース運営には、開

催形式の検討から修了証の授与まで学内外で様々な検討と手続きを要する。今年の2回目のオンライン開催を通して、学習機会を保持することの意義と、開催形式に合わせた適切な運営体制を整える重要性がより明確になったように思う。持続可能なサマーコース運営のためには、学生のニーズに沿ったコース内容、スケジュールの再検討、受講生・講師・スタッフの心身の安全を担保するサポート体制の3点が不可欠であり、よりよいサマーコースについて今後も引き続き慎重に検討されることを願う。

最後に、改めて2022年度SCJにご支援、ご尽力くださった全ての皆様に、心から御礼申し上げたい。

#### 注

- (1) 2022年度SCJ運営メンバーは、国際学術交流副学長、グローバル言語教育研究センター(RCGLE)センター長、事務局長、学務部長、SCJ主任、SCJ教務主任、SCJ交流プログラム担当、SCJ事務室担当によって構成された。



## 教務報告

教務主任  
 西野 藍

本稿では、2022 年度夏期日本語教育 (Summer Courses in Japanese、以下 SCJ) のコース概要を示し、運営の詳細について報告する。

### 1. SCJ のコース概要

#### 1-1 全体のスケジュール

コースは7月4日(月)から8月11日(木)までで、プレースメントテストの期間を含めると7週間にわたった。授業日数は、祝日も含めた29日間であった。プレースメントテストの前の週がICU春学期の期末試験期間であり、SCJ受講を決めたICU本科生にとっては春学期を終えてすぐのコース開始となった。

表1 コース期間

月	火	水	木	金
6/27	6/28	6/29	6/30	7/1
プレースメントテスト			講師オリエンテーション	
7/4	7/5	7/6	7/7	7/8
学生オリエンテーション	授業			
7/11	7/12	7/13	7/14	7/15
授業				
7/18(祝日)	7/19	7/20	7/21	7/22
授業				
7/25	7/26	7/27	7/28	7/29
授業				
8/1	8/2	8/3	8/4	8/5
授業				
8/8	8/9	8/10	8/11(祝日)	8/12
授業			期末試験・修了式	報告会

#### 1-2 授業時間

授業は表2の通り行われた。オンライン開催であった昨年度にならって開始時間を8時30分、1コマを60分とし、日本時間の午前中には授業及び個別指導が終わるようにした。それに伴い、コース期間もまた昨年同様に対面開催時より長く設定したが、これは単位認定に必要な授業時間数を確保するための措置であった。週15コマのうち2コマを適宜「個別指導」のコマとしたほか、火曜日と金曜日の12時から13時までの時

間帯に、参加任意の会話セッションやアクティビティを実施した。

表2 授業時間と1週間のスケジュール

	月	火	水	木	金
1 限 8:30-9:30	授業	授業	授業	授業	授業
2 限 9:40-10:40	授業	授業	授業	授業	授業
3 限 10:50-11:50	授業	(個別指導)	授業	(個別指導)	授業
12:00-13:00		会話セッション等			会話セッション等

### 1-3 開講レベルと担当講師

今年度は、入門レベルから上級レベルまで計6コースを開講した。大学の方針のもと、受講者が1名でもいれば講師を配置してコースを開講することに決まったが、上級レベルの参加者が少ないことが見込まれたため、C6とC7に変わって個別対応中心のAdvanced Optionというコースを設けた。各コースの担当講師は表3の通りである。

表3 コース担当講師

コース	コーディネーター	ティーチングスタッフ
C1	吉田 睦**	風間 美鈴
C2	貴志 佳子	渡辺 真由子*
C3	武田 知子**	小柳津 成訓
C4	本間 邦彦	岡田 彩
C5	成 永淑	中 智恵子
Advanced Option	宇賀持 綾子	-

注 表中の\*はICU日本語教育課程の非常勤講師、\*\*はICU日本語教育課程の専任講師を示す。

### 1-4 各コースのレベルと使用教材

各コースのレベルと使用教材は表4の通りである。日本語教育課程（Japanese Language Programs、以下JLP）から通常学期に使用した教材及び副教材が提供されたことで、どのレベルにおいてもJLPコースと同様の質を保つことができた。学習プラットフォームはGoogle Classroomとし、それを通じて全ての教材や資料を共有する方法を採用した。利用にあたっては学外の講師および受講生へのICUネットIDの発行が必要であったため、ITセンターの協力を仰いだ。

使用する教材や資料の共有についても昨年度同様に細心の注意を払い対処した。具

体的には、ダウンロード等ができない「禁共有設定」をし、各教材の表紙上に注意書きを書き込み使用した。また、適切な使用についての署名 (Intellectual Property Statement) の提出を全ての講師と受講生に徹底した。なお、C4 では、JLP で執筆し、2022 年 5 月に出版されたばかりの『タスクベースで学ぶ日本語 中級 1』(スリーエーネットワーク) を講師と受講生に配布して使用した。

表4 各コースのレベルと使用教材

コース	レベル (CEFR)	教材
C1	初級 (A1)	『ICUの日本語1』を元にJLPで作成し、学内で使用している教材 (topic1-8) とワークシート 『新版Basic Kanji Book—基本漢字500—Vol. 1』(凡人社) L1-5
C2	初級 (A2)	『ICUの日本語1』『ICUの日本語2』をJLPで作成し、学内で使用している教材 (topic1-8) とワークシート 『新版Basic Kanji Book—基本漢字500—Vol. 1』(凡人社) L6-14
C3	初級 (A2)	『ICUの日本語 2』『ICUの日本語 3』を元にJLPで作成し、学内で使用している教材 (topic1-7) とワークシート 『新版 Basic Kanji Book—基本漢字 500—Vol. 1』(凡人社) L15-22
C4	中級 (B1)	『タスクベースで学ぶ日本語 中級 1』(スリーエーネットワーク) 文型・表現練習シート、漢字の言葉練習シート
C5	中級 (B1)	JLPで作成し、学内で使用している教材 (ICU中級日本語2) 文型・表現練習シート、漢字の言葉練習シート
Advanced Option	上級 (B2)	学習者に合わせて適宜生教材等を使用

## 2. SCJの教務

実施にあたっては、今年度も RCGLE (グローバル言語教育研究センター)、事務室、IT センター、総合学習センター所轄のヘルプデスク、特別学修支援室 (Special Needs Support Services、以下 SNSS)、カウンセリングセンター等からのサポートを得た。学内各部署の協力がなければ、オンラインコースを円滑に進めることは不可能であったと思われ、改めて御礼申し上げたい。

運営スケジュール及び参加者については「総括」に詳しいことから、以下は教務関連で今年度工夫した点や特筆すべき点について簡単にまとめる。具体的には、講師の採用と開講レベルの決定、SCJ 助手の採用、プレースメントテスト、授業ビジター、講師に対するサポート、SNSS との連携の 6 点である。

### 2-1 講師の採用と開講レベルの決定

オンライン開催決定後、12 月より講師募集を開始した。例年、学生募集より先に講

師募集を行うのは、本学の SCJ の理念を十分に理解し、より良い授業が行える外部講師を確保するためである。今年度の募集要項にはオンライン開催であることも明記したが、国内外から多くの応募があり、ICU の日本語教育への関心の高さがうかがえた。主任と教務主任によるスクリーニングを経て、採用者を決定した。

主任報告にもあるように、準備段階で学生数が少ないことが見込まれたため、二つの対応を行った。一つが講師雇用条件（キャンセルポリシー）の決定、もう一つが開講レベルの検討である。開講レベルについては、応募学生の希望レベルの情報をもとに C6 のキャンセルを決め、Advanced Option コースの開講を決定した。C3 もキャンセルを検討したが、コース開始後、このレベルに入る受講生がいる可能性は高いとの判断から、事前キャンセルはせずに講師を配置した。流動的な状況の中、開講レベルと講師配置の確定は慎重にせざるを得ない面があり、採用通知ではなく内定通知とするなど例年との違いもあったが、どの講師も辛抱強く待ってくださった。講師の多くは過去に SCJ を担当した経験があり、これまでの信頼関係があったからこそではないかと思われる。

結果として、開始直前・直後のコースキャンセルは発生せず、担当講師のキャンセルも生じなかった。プレースメントテスト後の各レベルの受講生の数を見ると、いずれも適切な判断だったことがわかる。SCJ 定例会で検討を重ねた末の創意工夫によって、SCJ の運営に最も支障のない形で、講師数をできる限り抑えることができた。

## 2-2 SCJ 助手の採用

今年度は、教務と交流プログラムの業務補佐を ICU 生から採用した。日本語教育の現場でどのようにオンラインの短期プログラムが運営されているのかを知ることは、特に日本語教育に関心がある ICU 生にとって貴重な経験となるからである。その目的に鑑み、日本語教員養成講座の受講生に応募を呼びかけたところ、大学院生 2 名、学部生 2 名の応募があった。うち 3 名を教務と文化の双方を担う SCJ 助手として雇用した。

また、今年度も学生ボランティアを募集した。SCJ 受講生とボランティア学生との交流の機会をいかに増やすか、主任、教務主任、交流プログラム担当者で相談を重ね、日本語の授業への参加（授業ビジター）、Conversation Sessions、Language Buddies の活動を行うことを決めた。SCJ 助手の活躍及び Conversation Sessions、Language Buddies については、「交流プログラム報告」を参照されたい。

## 2-3 プレースメントテスト

プレースメントテストは、昨年度の内容と流れを踏襲しつつ、部分的な改善を図った。受講生一人ひとりに適切なクラスを決定するには、作文やスピーチ等で測定できる日本語力だけでなく、学習歴、期間中の学習環境、本人の学習意欲、他のクラスメートとのバランスなど、複数の側面からの総合的な判断が必要である。そのため、今年度は事前提出課題の種類を増やし、スピーチ動画を加えるなどして、開始直前のレベル判定のためのデータを充実させた。

受講生の日本語レベルについて、これまでは応募時の提出資料（自己申告によるレベルや学習歴）が基礎データとなっていたが、実際のコース開始までには 3 ヶ月の期間が

あり、その間にレベルが上がる可能性は高い。そこで、今年度は試みとしてプレースメントテスト時に改めて学習歴や希望レベルを問うアンケートを行った。結果、応募時より1レベル上（または下）で回答した人が相当数いた。このことから、応募時に加え、開始直前のタイミングで再度アンケートを実施しておくのは有効だと思われる。

レベル判定は、昨年同様、以下のプロセスで行った。まず、授業開始直前の判定会議において、講師が事前提出物をもとに協議し、初日に入るレベルを決定した。続いて、授業初日に面談を行い、必要な場合はレベルを移動して再度面談をし、最後に全体での判定会議でレベルを確定した。判定に必要な情報が十分に得られたことで、レベル確定までのプロセスが非常にスムーズに進み、どのコースも良い滑り出しとなった。この点は、期間が短い SCJ において特に重要だったと考える。

## 2-4 授業ビジター

SCJ ではこれまででもビジターセッションを実施してきたが、特にオンラインコースにおける授業ビジターの参加は、参加者のモチベーション維持やコースの活性化に役立つ。そこで、今年度もコース期間中、各コース、人数も回数も無制限で希望があれば都度手配する方式をとった。複数のコースが同時に多くの人数のボランティア参加を希望した日もあり、確保に苦勞することもあったが、教務主任と SCJ 助手の協力体制を通じ、概ね順調にボランティアを手配することができた。

結果、期間を通じて、30 回のビジターセッション（全レベルの合算）が行われ、65 名の ICU 生がビジターとして授業に参加した（重複参加あり）。学んだ日本語を試す機会が少ないことなどの問題点の解消につながり、各コースの教員、受講生から非常に喜ばれるとともに ICU 生にとっても良い経験の場となった。さらに、コース終盤には、SCJ に関わりのあった部署の担当職員にも案内を送り、複数部署の職員にビジターとして授業に参加していただいた。オンライン開催では授業の様子がみえず、なかなか実感しにくいことを考えると、実際に授業に出て受講生と交わる機会を持ってもらうことができたのは有意義であった。

## 2-5 講師に対するサポート

「総括」の講師アンケート結果にある通り、SCJ 主任や教務主任による期間中のサポートは一定の評価を得られた。上述の授業ビジターの手配の他、授業運営におけるサポート、講師同士の情報交換・交流の場づくり等、評価が高かったものについて簡単に報告する。

### 2-5-1 授業運営におけるサポート

授業開始後は各コースコーディネーターがコース運営の責を担うが、オンラインの場合、担当講師はそれぞれの職場や自宅からコースを運営することになる。1 人で問題を抱えてしまうことがないように、期間中は常に SCJ 主任と教務主任がパソコンの前で待機し、IT ツールを活用して講師とオンタイムで連絡を取り合える体制を作った。それによって質問や相談に随時対応でき、また不測の事態にも備えることができた。加え

て、週に数回、SCJ 主任と教務主任が授業ビジターの立場で授業に参加し、講師と受講生に負担のない形で全クラスの様子を知ること努めた。

さらに、講師が授業に集中できるように資料作成などの事務的な負担をできるだけ減らし、終了時アンケートにも工夫を加えた。例年、終了時の受講生アンケート回答を講師が見ることができるのは報告会（成績提出）後であったが、今年度はそれとは別にクラスごとのアンケート作成・実施し、学習者からのフィードバックを担当講師が直接確認できるようにした。そして、報告会ではそれらについて担当者としての解釈や見解を報告してもらった。具体的なデータをもとに自身のコース運営を振り返り、他の教員と意見交換したりすることができたのは、担当講師の気づきや学びという点からも有益であったようである。

## 2-5-2 講師同士の情報交換・交流の場づくりー日本語教育情報シェア会ー

2-1 でも述べたように、SCJ の鍵を握るのは優秀な講師の確保である。繰り返し参加している講師の多くがその理由として「成長の機会になる」ことをあげているが、特にオンライン開催の場合、他の講師や ICU 教員との自然な交流の場は限られてしまう。そこで、今年度の試みとして、授業外の時間に緩やかなテーマを定めて情報共有・意見交換する場「日本語教育情報シェア会」を設定し、自由参加の形式で 3 回開催した。SCJ 講師の中には、日本国外の教育機関で活躍されている方も少なくない。いずれの回も、各地での実践や日本語教育事情、新しい IT ツールや教材等についての情報共有や意見交換が行われ、非常に有意義な会となった。オンラインコースにおいても、このような良質なコミュニティづくりは可能であり、重要であることを改めて実感した。

## 2-6 SNSS との連携

最後に、今年度の特筆すべき点として、SCJ 期間を通じた SNSS オフィスとの効果的な連携をあげたい。昨年同様、オンラインであっても学習支援が必要な受講生にはできる限りの支援をしたいと考え、Application for academic accommodations のリンクを事前に掲載して申請を促した。結果、1 名の申請があった。2022 年春学期からの継続申請だったことから、開始前には JLP 担当教員と SNSS 職員とで SCJ 期間中の支援のあり方を協議し、通常学期同様のサポートができるような態勢を整えた。主に支援に携わったのは、SNSS 職員、SNSS 学生チューター、SCJ 教務主任、SCJ 担当講師である。

SNSS 学生チューターは、毎週 1 回（90 分）のチュートリアルを行い、予習復習などを個別にフォローした。チュートリアル後には毎回チューターから詳しい報告が SCJ 教務主任に送られ、SCJ 担当講師に共有された。それを受けて、SCJ 担当講師から授業中の様子などの報告があり、再度、SCJ 教務主任を経由して SNSS チューターに共有された。その結果、通常学期にも増してペースの早いコースであったにも関わらず、申請者は見事に目標を達成することができた。これは本人の真摯な学習態度があったこそだが、総勢 5 名の教師や職員、チューターが情報を共有しあいながら、相補的に支え続けたこともまた大きな要因だったことは間違いない。ICU でこれまで培われて

きた学習支援の形が SCJ においても存分に発揮された意義深いケースとなった。

### 3. おわりに

以上、2022 年度 SCJ のコース概要を報告し、教務に関連する SCJ 運営の概要をまとめた。SCJ 開催中、新型コロナウイルス感染拡大の第 7 波が日本を襲い、過去最大規模の大流行となったのは全くの想定外のことであり、不安もあった。それにも関わらず、大きな問題もなくコースを継続し、終了することができたのは、これまでのオンラインでのコース運営や授業の経験が十分に蓄積され、引き継がれていたからであろう。また、このコースに参加して良かった、選んで良かった、日本語を学ぶことができたという受講生の前向きな姿勢に何度も勇気づけられた。インテンシブな 6 週間のコースに毎日オンラインで参加するのは決して簡単ではなかったはずである。それにも関わらず、ほとんどの受講生が途中で諦めることも投げ出すこともなく、最後まで学び続けた。

本 SCJ は、新型コロナウイルス感染拡大による教育への影響を最小限とするべく、関係各位の英知を結集した結果が形となったものであり、ICU の「教育を止めない」姿勢そのものであったと感じている。この経験は、今後必ず生かされていくことであろう。これまで長きに渡り SCJ をご支援くださり、ご尽力くださった皆様に改めて心より感謝申し上げます。

# 交流プログラム報告

交流プログラム担当  
保坂 明香

## 1. はじめに

2022年度の夏期日本語教育（以下、SCJ）は、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、昨年に引き続き二度目のオンライン開講となった。交流プログラムでは、昨年の課題を検討し、今年度もオンラインの環境で、受講生がICUの学生と交流し、日本文化を学べる活動を考え実施した。以下に、2022年度の交流プログラムの活動内容や活動後に実施したアンケートの結果を報告する。

## 2. 実施の経緯と交流プログラム全体の準備

交流プログラムは例年、「文化プログラム（Culture Program）」という名称で、受講生の日本語や日本文化に対する理解を深めることを目的とし、文化体験活動を学内外で実施している。だが今年度もオンラインでSCJが開講されることが決定されたため、昨年実施し、受講生から一定の肯定的な評価を得た Language Buddies と Conversation Sessions を「交流プログラム（Exchange Activities）」として実施することにした。活動実施の前には、本学のサマーコースでしかできないことは何かを検討したが、その点でもこの2つの活動は受講生とICUの学生が主体となって活動できるという点で目的に適うと考えられた。また、現在も続くコロナ禍によって、留学生とICUの学生の交流の機会が以前より減っていること、言語を学習していてもそれを自由に使用する場が限られている状況を考慮しても、学生同士が自主的に交流できる Language Buddies と、教室で学んだ言語を用いてクラスの外で会話をすることができる Conversation Sessions は実施の意義があると思われた。プログラムの内容や活動の進め方を検討する段階においては、通常学期に学内で Language Tables と Language Buddies を運営している国際交流室ならびにこの活動の発起人の上野優佳子講師にミーティングを依頼し、実施の経緯や運営の仕方、現状の問題点などを伺い、本プログラムを実施する上で参考にした。

準備に際しては、「教務報告」でも述べられているが、SCJ助手（以下、助手）を本学の学生から採用した。助手は教務プログラムと交流プログラムの業務補佐に携わったが、交流プログラムでは主に、担当教員と連携し、Conversation Sessions の企画と準備、運営をリモートで行なった。

またSCJでは例年、ICUの学生ボランティアの協力を得て、授業活動の一部や交流プログラムの活動を実施しているが、今年度も実施に先立ち、構内でのポスターの掲示や、日本語教育関連のクラスでの周知を通してボランティアを募集した。こうした周知の結果、74名のボランティア登録があった。

### 3. Language Buddies

#### 3-1 Language Buddies の準備と実施

今年度は受講生と Language Buddies の活動を希望する ICU の学生がほぼ同数であったため、受講生一名に対し、ICU の学生一名をペアとして充てた。バディの連絡先がそれぞれに与えられても、交流活動がスムーズに始められるかどうか懸念されたため、授業担当講師の協力のもと、初日の授業時間の一部を使って、受講生と ICU の学生の顔合わせをすることにした。学生達はこの時間を使って互いに自己紹介をし、連絡先の交換、次回ミーティングの日程調整等を行なった。

昨年の終了時のアンケートに「バディと何を話せばよいかわからなかった」「次第にバディと連絡を取らなくなった」という回答があったため、開講期間中のサポートが重要だと思われた。このため、コースの中間時にアンケートを実施したが、回答は活動に対しての肯定的な意見のみで、サポートを受けたいというものは見られなかった。ただ、活動を希望するものの、連絡先を紛失したというペアがあったため、再度連絡先交換の対応を取り、その後活動を再開できたというケースがあった。

#### 3-2 Language Buddies のアンケート結果と反省

受講生の終了時アンケートを見ると、期間を通じてバディと会った回数は4、5回、または1、2回という回答が多く、6週間という SCJ の期間を考えると、必ずしも多い回数ではない。だが、活動に対する評価は概ね高く、活用した受講生からは「I enjoyed talking to my language buddy. We were able to have good conversations in Japanese. I really enjoyed the time. (バディと話すのは楽しかった。日本語で楽しく会話することができた)」<sup>(1)</sup>「We practiced the grammar and new words together for one week, which benefits a new learner like me. (文法や新しい単語と一緒に練習できたことは、自分のような初学者にとって大きな収穫だった)」等の回答を得た。一方で、一度もバディと会わなかった受講生であっても、Language Buddies の活動を肯定的に捉える意見も見られた。その回答者の記述には「They seemed like a very nice and enthusiastic person, who was willing help out if anything was needed. I however chose to just not make use of it. (バディは親切な人のようだったが、この活動に参加しないことにした)」とあり、自分自身の学習スタイルに合わないため、活動に参加しないことを決めたと捉えられる記述であった。このことから示されるのは、活動形式そのものが学習者の学習やコミュニケーションのスタイルに合わないことがあり、意義を認めつつも活用しない者も一定数いるということである。以下の4節で類似した回答について報告するが、プログラムの担当者は様々な学習者がいることや学習者が様々な学習スタイルを持つことを考慮し、多様な交流活動の機会や文化学習の機会を提供することが求められると考える。

### 4. Conversation Sessions

#### 4-1 Conversation Sessions の準備と実施

Conversation Sessions は、受講生が教室で学んだ言語をクラスの外で運用練習する場であるが、過去の SCJ 実施後アンケートでは、「話すトピックが見つからなかった」

「セッションで話されている日本語が難しすぎて会話についていけなかった」という声が聞かれることがあった。このため、多くの受講生が参加しやすい環境になるように、SCJ 主任および教務主任と内容や進め方を検討し、初学者にとっても話しやすい身近なテーマをセッションごとに提示することを考えた。また現在、日本文化を体験するコンテンツはインターネット上で多く提供されているが、本学で実施できることが何かを考え、日本文化関連の部活動や過去に SCJ の文化体験で協力を得た寺院等のサポートを受けて、文化イベントも取り入れることを検討した。助手の勤務が開始した6月下旬以降は助手が中心となって、検討、準備を行なった。そして、Conversation Sessions の具体的な実施内容や話し合いのテーマを助手が考える際は、交流プログラム担当が助言し、アイデアを一つのセッションとして実現するために検討を重ねた。諸々の調整の結果、助手が主導で進めるテーマ提示の会話セッションは8回、部活動と大学外の講師を招致し実施するイベントは3回行なわれた。以下、表1にセッションの実施日、実施内容、協力者、実際の参加人数を示す。Conversation Sessions は毎週火曜日と金曜日の 12:00 - 13:00 に実施し（坐禅体験学習は1時間半のプログラムであったため、休憩を挟み 12:30 - 14:00 に実施）、プラットフォームには Zoom を利用した。

表1 交流プログラム 実施イベント一覧

実施日	実施内容（内容の詳細）	協力者	参加人数	
			受講生	ボランティア
7/5（火）	テーマ：七夕（七夕の説明、願い事について話す）		10	4
7/8（金）	イベント：茶道（茶道の説明、茶道実演の中継、質疑応答）	ICU 茶道部	8	2
7/12（火）	テーマ：音楽・映画（日本や海外の映画や音楽についてのクイズ、好きな映画や音楽について話す）		7	5
7/15（金）	テーマ：日本の弁当文化（弁当の紹介、和食の作り方の動画説明、食文化について話す）		5	3
7/19（火）	テーマ：日本語・言語（日本語の知識のクイズ、日本語や他の言語の違いについて話す）		5	4
7/22（金）	イベント：和太鼓（和太鼓の説明、和太鼓実演の動画視聴、質疑応答）	ICU 和太鼓部	4	1
7/26（火）	テーマ：日本の小学校（日本の小学校の文化の説明、感想を話す、質疑応答）		4	2
7/29（金）	テーマ：お気に入りの場所（SCJ 助手の好きな場所についての説明、自分の好きな場所や行きたい場所について話す）		4	3
8/2（火）	テーマ：日本の恋愛（日本の恋愛文化や恋愛に関する用語の説明、感想を話す）		4	1
8/5（金）	イベント：坐禅体験学習（仏教、禅文化についての講義、坐禅体験、質疑応答）	東京禅センター	9	5
8/9（火）	日本の古典『枕草子』の説明とクイズ、今年の夏を振り返って話す）		5	3

助手は、各セッションにおいて参加者間の交流が活発に行なわれるように、また、受講生が言語や文化を学ぶ機会が得られるように内容や進め方を工夫し、スライドや動画、日本文化のクイズなどを準備していた。以下が助手がセッションのために作成したスライドや動画の一例である。

テーマ「日本の弁当文化」



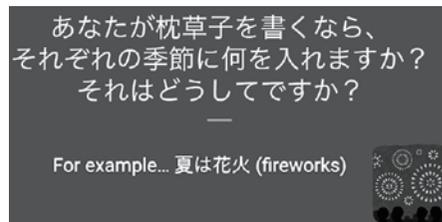
修士1年（当時）助手A 作成

テーマ「日本の恋愛」



学部4年（当時）助手B 作成

テーマ「日本の古典」



学部3年（当時）助手C 作成

図1 助手が作成したスライドの例

また、Conversation Sessions で使用する言語の調整についても検討がなされた。話し合いの結果、日本語だけでなく様々な言語を用いて自己表現をする経験がセッションでできること、さらには、参加者が自由に交流できることを重視し、日本語以外の言語を使用することもよいこととした。その上で、初級の学習者がテーマを理解し、言語の壁を感じることなく参加できるように、テーマを提示する際は、日英両語で説明が書かれたスライドを見せることや、平易な日本語で参加者に伝わるようにゆっくり話すことにした。

セッションの前日には、受講生とICUの学生にその日の活動内容が伝わるようにメッセージを作成し、連絡用の Google Classroom（以下、Classroom）にポスターを掲載して参加を呼びかけた。以下に助手3名が共同して作成したポスターを示す。

### Conversation Sessions Schedule

We have conversation sessions every Tuesday and Friday from 12:00-13:00(JST). We have been talking, thinking and learning about these topics .  
Upcoming events will include a *Wadaiko* session (Japanese traditional drum performance by ICU drum club) and an online *Zen* meditation session by a real monk. Come and join us!!

Tue	Theme	Fri	Theme
7/5 DONE	七夕 (たなばた) 🌠 <b>Tanabata</b>  <ul style="list-style-type: none"> <li>• Short lecture on "Tanabata" (Japanese star festival)</li> <li>• Conversation Session with ICU students</li> </ul>	7/8 DONE	茶道 (さどう) 🍵 <b>Tea Ceremony</b>  <ul style="list-style-type: none"> <li>• Introduction of the Japanese tea ceremony by members of ICU tea ceremony club.</li> <li>• Live "Otemae (tea ceremony)" performance from Taizanso (a cultural property at ICU).</li> <li>• Q&amp;A session</li> </ul>
7/12 DONE	音楽 (おんがく) 🎵・映画 (えいが) 🎬 <b>Movie/Music</b>  <ul style="list-style-type: none"> <li>• Movie title quizzes (both in</li> </ul>	7/15 DONE	お弁当 (べんとう) 🍱 <b>Obento</b>  <ul style="list-style-type: none"> <li>• Introducing Japanese bento culture</li> </ul>

図2 助手が共同して作成した宣伝用ポスター

#### 4-2 Conversation Sessions のアンケート結果と反省

表1に示したように、初回の参加者数は受講生全体の3分の1程度であったが、その後、参加者は限られ、平均的には全受講生30名に対し6分の1程度の4、5名であった。参加者の増減を概観すると、文化イベントへの参加が多い傾向があることがわかる。先述したように、インターネット上にはすでに多くの体験型イベントやコンテンツが提供されているが、文化イベント(表1に「イベント」と記載)に通常より多い参加があったことを考慮すると、日本文化に興味を持つ学習者が一定数いることや、今回実施したイベントが受講生にとって興味を引く内容であったことが推測される。坐禅体験学習の活動後アンケートにおいても「新しい発見や学びがあった」「禅のことを知る良い機会となった」という回答があったことから、こうした活動が学習者に文化学習の機会や関心を与えたと考えられる。

Conversation Sessions 終了時のアンケート結果を見ると、参加した学生からの評価は良好で、「interesting topics, I am interested in relevant topics. (会話のトピックが興味深かった)」「there were a lot of different information about Japanese culture and customs. (原文ママ) (日本文化や習慣について多くの異なる情報が提示された)」「It was a good opportunity to practice speaking and learning about topics you might not normally talk about in a class. (クラスでは通常話されないトピックについて話したり学んだりする機会だった)」等の回答があった。また「It's too bad that more people didn't participate, I think it would have been a good way to meet more people. (原文ママ) (参加者が限られていたことは非常に残念である。このセッションは新しい人に会う機

会にもなっていた)」という回答も見られた。さらには、助手の企画と進行についても「The students did a fantastic job in preparing the presentations and it was easy to see how much time and effort they put into making the sessions educational and engaging. (時間をかけ準備をしている様子が見て取れた。セッションを教育的に、興味が持てるような内容にしようとする努力がうかがえた)」と評価していたことから、企画やそのための準備はある程度受講生の期待に応えるものだったと考えてもよいだろう。講師に対しても終了時にアンケートを実施したが、その中でも「受講生は大変興味を持っていて、時間が許す限り参加していた」「参加した学生は楽しく様々なことを学ぶ機会としていた」「この六週間で楽しく会話をするスキルを身につけることができたと思う」といった回答が複数あり、セッションが日本語で会話をする楽しさを受講生に与え、それを講師が評価していることが示されていた。さらには、「参加している学生は、クラスでも積極的に発言をしているように感じた」という回答からは、セッションへの参加が授業における積極性や日本語学習に影響を与えた可能性が示唆された。

一方、受講生アンケートには「参加できなかった理由」も記載されていたが、企画や進行等の不備、不十分さを指摘する意見はなく、その回答は全て自国と日本との時差、休憩時に実施される点、課題の量等によって参加が難しかったことに集中した。セッションについての事前の情報提供についても、適切かつ十分だったという回答がほとんどであったことから、運営の仕方や実施の内容は概ね適切だったと言ってよいだろう。ただ、受講生と講師アンケートのいずれにおいても、少数であったが、初級の学習者にとってセッションが難しい内容だったのではないかという回答が見られた。セッションは初級の学習者も参加しやすいように配慮がされていたが、それにも関わらず、上記のように捉えた回答者がいたということは、事前の情報提供や活動時の案内がこの点において十分ではなかったと言えるかもしれない。情報の内容や、何を使ってどのように伝えるかといった提供の仕方には、今後も工夫が求められる。

今年度の Conversation Sessions を振り返ると、参加者からの評価は肯定的であったが、受講生の全体数を考えると、参加した学生は必ずしも多いとは言えないだろう。また、ICU の学生の参加者も十分な数とは言えない。交流プログラムの活動は学生にとって任意参加であり、教育プログラムの副次的な位置付けでもあるため、活動内容や興味の有無に由来しない外的な要因によって、参加者の増減が左右されることもある。だがこれまで本プログラムは、受講生に日本語や日本文化学習の場、そして交流の機会を提供しており、これからもその役割を担っていくことができるだろう。今後どのような活動をプログラムで展開していくかを考える際には、オンラインでの学習や体験、そして情報収集が容易になった状況を踏まえ、受講生の変容するニーズを把握する必要がある。その上で本学でこそ実施可能な活動や学習の機会を提供することが求められるだろう。今回の受講生の Conversation Sessions についてのアンケートの中に一件「I do not like to talk with stranger to much. (知らない人と話すことをあまり好まない)」という回答があったが、これも重視すべき回答だと考える。いかにセッションの内容や進行、情報提供に工夫がなされていたとしても、コミュニケーションの方法や学習のスタイルとして、グループセッションを望まない学習者が一定数いることが示されているからである。

運営側は学習者がそれぞれのコミュニケーションスタイルや学習スタイルを持つことを念頭に置き、様々なニーズに合うように交流イベントや文化イベントを企画するとよいと考える。

## 5. SCJ 助手アンケートの結果と反省

オンラインでの実施は今年度で2年目となるが、昨年と異なる点は、助手が業務補佐にあたった点である。SCJでは助手の任用をこれまでも継続的に行なっているが、今年度は特に交流プログラムの Conversation Sessions において、運営者として役割を担った。先述したように助手の業務は交流プログラム担当の教員の指示のもとで行なわれたが、助手のプランを実現するまでには話し合いが重ねられた。助手はこの話し合いを継続的に行なうことにより、次第に自らの力でアイデアやプランを構築できるようになっていった。また、よりよいセッションを行なうためには何をすればよいかを自主的に考え、必要だと思われることはすぐに実行し、その成果を振り返り、反省点や改善点を挙げ、次のセッションに生かしていた。助手の任用はコースにとって重要であるが、助手にも学びと成長の機会を与えていると思われる。以下に終了時に助手に実施したアンケートの回答を抜粋する。

質問：業務を通して学んだこと、やってよかったと思うことは何か。

助手 A の回答：

Conversation Sessions のトピックを発展させて、具体的なアクティビティを考えると、学生がそのトピックに関して頭の中に何を持っているか、またそれを使ってどう話すかを考える必要があるということ。

助手 B の回答：

- ・どこまで英語を使うべきか？全て日本語にした場合、初級の生徒はどう感じるだろう？と様々考えたことで、①学習者の目線に立って考えること②目的に応じた教授言語の選択について考えが深まりました。
- ・情報シェア会→世界の様々な教育機関で働いておられる／来られた先生方の話を聞くことで日本語教育に関する知見が広がった気がしました。

助手 C の回答：

【企画・運営】目的を決めてイベントの企画や円滑に進めるための手段を考えるプロセスを学びました。互いに意見を出し合いながらより良いものを作っている手応えも感じました。

【デジタル】オンライン上で行っているうえで活用できるツールや資料の作り方など今後も活かせるスキルを学びました。

【考え方】多くの方と関わる中で、正しい情報の発信と管理をしなければならない責任感を実感しました。対面で会えない中コミュニケーションを取りにくいと感じる部分もありますが、自分なりに克服して解決策を探るきっかけになりました。

## 6. おわりに

以上、2022年度の交流プログラムの活動内容とアンケートの結果を報告した。昨年に引き続きオンラインでの実施が決定されたため、昨年度得られた成果や課題を検討し、発展した形でプログラムが提供できるよう模索し実施した。参加者からは一定の肯定的な評価を得ることができたが、こうした活動に参加した学生に限られていたことは課題として残る。今年度は実施した Conversation Sessions と Language Buddies が異なる活動として、相補的に学生に交流と学習の機会を提供していたと言えるかもしれないが、今後は受講生のニーズを調査し、また、他プログラムで実施している活動内容を参考にして、幅広くプログラムを展開していく必要があるだろう。今後も一層の検討と工夫が求められる。

本年度も交流プログラムの活動実施にあたっては、サマーコース教員、ICU 教職員、文化イベント講師、ICU の学生から多大なご支援をいただいた。ここに心より感謝を申し上げたい。

## 注

- (1) 本文中で紹介するコメントは、受講生が書いた原文を記載し、英語のコメントには ( ) 内に執筆者による日本語訳を付した。

# 事 務 報 告

## 1. スタッフ

Mark Williams	国際学術交流副学長
藤井 彰子	グローバル言語教育研究センター長
桜木 ともみ	夏期日本語教育主任
西野 藍	夏期日本語教育教務主任
保坂 明香	夏期日本語教育交流プログラム担当
橋本 明子	学務部長
谷治 由美子	グローバル言語教育研究センター事務室業務担当
卯野 夏樹	グローバル言語教育研究センター事務室業務担当
林 久美	グローバル言語教育研究センター事務室業務補佐
池田 亜紗	グローバル言語教育研究センター助手
張 名瑤	グローバル言語教育研究センター助手

## 2. 講師内訳

	人数
ICU 専任	2
ICU 非常勤	1
ICU 以外 (国内)	5
ICU 以外 (海外)	3
合計	11

3. 2022 年度 夏期日本語教育 カレンダー（オンライン開催）

月	火	水	木	金
6/20	6/21	6/22	6/23 Zoom 接続チェック	6/24 Zoom 接続チェック
6/27 プレースメント テスト	6/28 プレースメント テスト	6/29 プレースメント テスト	6/30 講師 オリエンテーション	7/1
7/4 学生オリエンテー ション	7/5 授業開始 CS	7/6 講師会	7/7	7/8 CS
7/11	7/12 CS	7/13 講師会	7/14	7/15 CS
7/18（海の日）	7/19 CS	7/20 講師会	7/21	7/22 CS
7/25	7/26 CS	7/27 講師会	7/28	7/29 CS
8/1	8/2 CS	8/3 講師会	8/4	8/5 CS
8/8	8/9 CS	8/10	8/11（山の日） 期末試験 （授業終了） 修了式	8/12 報告会 成績・報告書 提出締め切り

注

- ・網掛けは授業期間。
- ・CS は Conversation Sessions の略。
- ・2022 年度祝日 7/18（月・海の日）、8/11（木・山の日）は授業開講。

#### 4. 受講者に関する統計

##### A. 応募者内訳

応募者	40
辞退者	3
合格者*	37
不合格者	0

\* 合格者 37  
合格後辞退者 7

受講者	30
-----	----

##### B. 受講者内訳

###### ① 身分別

	男	女	計
一般受講者	2	4	6
シリア人学生イニシアチブ	2	0	2
ウクライナ人学生	0	5	5
教育交流プログラム受講者*	3	1	4
9月入学予定者	0	1	1
在学生受講者	2	9	11
ICU 教員 (教員家族含む)	1	0	1
合計	10	20	30

###### \* 〈内訳〉

University of Leeds	1	0	1
Lingnan University	0	1	1
Rutgers University	1	0	1
University at Buffalo (SUNY)	1	0	1
合計	3	1	4

###### ② 国 / 地域

China	8	Syria	2	USA	6	Vietnam	4
Korea	3	UK	1	USA/Japan	1	Ukraine	5
						TOTAL	30

## 5. その他事務報告

### 5-1 オンライン環境の整備

2020 年度から段階的に学生募集と講師募集のオンライン化を進めてきたが、今年度はフォームメーカーを複数活用することで、オンラインのみで応募手続きを完結させることができた。

また、2020 年度以降、オンラインクラウドストレージやチャットツールを導入すると共に、セキュリティ面で問題のあるツールやアカウントの削除を実施した。

### 5-2 SCJ Certificate

2021 年度から修了証の電子発行を開始している。今年度は 28 名に発行した。